

石橋も叩いて渡った経済人

大正12年(1923)9月1日。関東大震災が発生した日である。死者・行方不明者は約10万5千人。未曾有の被害をもたらした。流言も飛び交い、社会に不安が走った。

当時、県内の銀行は不測の事態を恐れ、店を閉めた。そんな中、営業を続けた銀行があった。株式会社茨城農工銀行である。その決断をした人物が頭取だった齋藤斐(1855-1938)である。

斐は旧守谷町(現守谷市)の齋藤家の長男として生まれた。当主は累代、徳左衛門を襲名。江戸時代、齋藤家は旧下総国関宿藩領のうち茨城県南地方にあった10カ村の惣名主を務めていた。

斐は自叙伝『一夢七十八年』で「当時の私の宅は、住宅である外に、役所でもあり、百姓の會所でもあり、更に時としては大名の旅館でもあった」といい、「累代苗字帯刀御免であった」と述べている。

慶応2年(1866)、斐は同じ旧関宿藩領の名家で、親類でもあった猿島郡辺田村(現坂東市)

の中山家に寄宿する。当主中山元成は「猿島茶」の海外輸出を手掛けた人物で、斐は西洋文化に目覚めていった。

慶応大学で学んだ後、郷里に戻った斐は仲間と共に政治結社「改進黨」を結成。明治13年(1880)、旧筑波町(現つくば市)で開かれた国会開設請願を決めた会議に参加。以後、政治家を志す。

翌明治14年(1881)、北相馬郡から県議会議員選挙に立候補し当選。県議を4期務めた後、明治25年(1892)、国会議員選挙に出馬し当選。衆議院議員を3期務めて政界から退いた。

明治29年(1896)、国は農工業の発展を目指し日本勸業銀行法及び農工銀行法を公布。各府県に一行ずつ農工銀行が設立されることになり、斐は設立委員の一人に選ばれた。

(株)茨城農工銀行は、明治31年(1898)、水戸市に開業された。昭和19年(1944)、日本勸業銀行に吸収されるまで、特殊銀行として県内産業振興に多大な役割を果たした。斐

齋藤斐

Akira Saito

は取締役として開業時から経営に参画した。

同行は不動産を抵当に長期低利の貸付を業とした。しかし、ふたを開けてみると借入申込者は「大半カレコレ屋の山師ばかり。運動をうまくやったものが借入に成功し、賄賂は公行」(『同』)の有様だった。

解雇された支配人の後任を斐は自ら買って出た。守谷の自宅も弟に託し、水戸に住居を構えた。明治33年(1900)、新莊頭取に替わってトップの座に就いた。

頭取となった斐は「太ることを急ぐよりも損をするな」と説き、「石橋も叩いて渡れ」と堅実一方を主義とした。「砂糖袋一つの贈りものでも之を小包郵便に託して返送した」(『同』)と振り返る。

結果、得たものが信用だった。関東大震災の時、不休業ができた理由もそこにあった。斐は「仮に取り付けが来ても支払準備のあるだけを払い、できなくなったら事情を話し、了解してもらおう。農銀の信用をもってすれば必ず納得してくれる」(『同』)。

斐は昭和8年(1933)、職を辞するまで同行頭取を33年間務めた。この間、常総鉄道株式会社の設立発起人に名を連ね、設立後は監査

役の立場で現関東鉄道常総線の開通に力を尽くした。

『市民のつくった守谷史』は、斐と弟隆三を「明治維新後の守谷に現れた彗星のような人材」と郷土の偉人を誇らしげに書いている。(文中敬称略)

主な参考文献

『一夢七十八年』(昭和7年、齋藤斐述、齋藤隆三編纂兼発行)。『守谷町史』(昭和60年、守谷町発行)。『市民のつくった守谷史』(平成28年、守谷市観光協会発行)。



齋藤斐も開業に尽力した関東鉄道常総線
=守谷市御所ヶ丘一丁目、新守谷駅で(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「信用の持つ潜在力」